

早期医療体験記

高校二年 Y・T

はじめに

私は七月二十三日から二十六日の四日間、順天堂医院で早期医療体験に参加させていただいた。これは読売教育ネットワークと順天堂医院が主催する、医学部を強く志し外科に関心のある高校二・三年生に向けたプログラムである。このプログラムの最大の特徴と言えば、他の病院の医療体験には無い、手術室の中を見学させていただける、というとても貴重な経験ができることだ。このプログラムには学校から一人しか応募することができず、その後読売新聞社が選考をするため、参加するのは難しいとされていた。しかし光栄なことにこのプログラムへの第一枠に参加させていただいたため、とても嬉しく思っている。そしてこのプログラムの存在を知っていただくのと同時に、素晴らしさを伝えたいと思い、体験したことを文章にする。

このプログラムの内容は、通常では医学部五・六年で行う臨床実習の外科分野を、高校生という早い時期から体験することである。このプログラムによって将来像を明確にすることで、よりプロフェッショナルな医師になれるのではないかという考えのもとである。

このプログラムは六枠に分かれており、一枠につき三人ずつ、第一・四枠は心臓血管外科と小児外科を二日間ずつ、第二・三・五・六枠は心臓血管外科を四日間見学できている。私はその第一枠に参加した。他のメンバーは埼玉の川越女子高校、千葉の市川学園の生徒で合計女子二人男子一人だった。

一日目と四日目に心臓血管外科、二日目と四日目に小児外科を見学した。

一日目

指定されていた場所に行くと、すでに他の二人の生徒が待機していて、全員二年生ということもあり、すぐに打ち解けることができた。医師にはコミュニケーション力が必要だというのが、全員医学部志望というだけあって、会話が続き、すぐに打ち解けることができた。隣の机には読売新聞の方が座っていて、大きなカメラを持っていたためとても緊張したのを覚えている。

少し待っていると心臓外科医の先生がお迎えに来てくださり、会議室で院長である天野先生にご挨拶に行った。そこでは天野先生が今もときどき読み返しているという新聞記事四枚をいただいた。その記事を見ると、医師という道を選ぶ覚悟というのを確認されたような気がした。そして、天野先生の言葉でとても印象に残っているものがある。人生は紙芝居のようなものであり、今回のプログラムではそのシーンを目に焼き付けて欲しい。ストーリーは自分で作るものだと言われたのだ。私はこのプログラムで、しっかりそのシーンを目に焼き付けようと決めた。

カンファレンスルームに移動し、実際に手術前に行われるカンファレンスに参加し、自己紹介をした。カンファレンスルームは全員が話しやすいような座席配置になっている。私が外

科医を志望していると話すとすぐに覚えてくださった。また、カンファレンス後にはわかりやすく手術内容を説明していただき、インフォームドコンセントのための説明本を貸り、縫合練習ができる紐も貰った。

その後は医師記録室へ向かい、実際の手術を見る前のオリエンテーションとして出血の少ない手術の録画を見た。私達は全員血が苦手ではなかったため、そのまま更衣室へ向かった。そこで私達は医学生用の黄色い手術着に着替えた。

手術室のあるフロアへ行くと、外科医が手を洗う場所があった。医療ドラマではブラシで手を洗っているシーンをよく見るが、それは昔の話のようで、現在では消毒液を使えば手で洗うだけで良いらしい。

いよいよ手術見学をする時がきた。手術室フロアの一番奥にある、手術室の中で最も広いハイブリッド手術室に案内された。ハイブリッド手術室とは、カテーテル治療などで使う、CTも用意された特別に広い手術室のことである。手術室へ入ると、執刀医である天野先生の前立ちをする医師が皮膚を切り始めた。その先生はとても腕の立つ先生であるため、天野先生が厳しくしているという。すぐに胸骨が見え、大きな音を立てて胸骨が切られた。皮膚を切っている間はあまり不安は感じなかったが、胸骨の切られた後の手術室の匂いを嗅ぐと、本当に患者は回復するのだろうかかと不安になった。行なっていた手術は僧帽弁形成術だった。心臓というのは胸を開ければすぐに見えるわけではなく、心膜を開けて糸で心膜を吊り上げて初めて心臓が出てくる。心臓が綺麗に見えるのと天野先生にバトンタッチした。人工心肺に切り替えるにあたって、送血管や脱血管を含めて合計六本のチューブを繋がなければならないということを知り、とても驚いた。心臓が止まると、すぐにメスが入った。

カンファレンスの時から手術内容を説明してくださり、そして手術中にずっと指導をしてくださったのは森田先生だった。手術着が青である理由など、手術に関係するもから直接は関係しないものまで、知らない知識をたくさん吸収できた。全ての病院で統一されているこの青は、血液が付くと黒くなるからであるという。

手術は僧帽弁形成術の予定であったが、僧帽弁置換術に変更になった。手術の中盤になって、台に乗って上から見せてもらった。その時始めて映像ではなく生で人の体の中を見た。心臓が想像より深いところにあっただけ驚いたが、それでも心膜を釣り上げているため上に出てきているのだと聞いてさらに驚いた。天野先生が前立ちの医師に怒るシーンが何回かあったが、それも含めて実際の手術シーンが見られた。

初日の最後にはシュミレーションセンターへ行った。実際の内視鏡手術で使う道具を使い、小さなコインを箱に入れたりピンを指定の場所に刺したり、楽しい内容で体験することができた。また、シュミレーションセンターでやり方を教えて下さったのは、ウイグル出身の大学院生だった。

二日目

昨日と同じ場所に集合し、今日は小児外科病棟のナースステーションへ行った。そこで一時間以上女性の小児外科医の先生とお話をさせていただいた。その先生は、医学部五・六年で行う病院実習（通称ポリクリ）の時に小児外科に行くことを決めたという。小児外科はフロアがとても明るく、壁にはたくさんのアンパンマンのキャラクターがいた。また、一般病棟よりも子供の声で少し賑やかであり、先生方と子供たちの距離の近さが子供達の笑顔を作っていると感じた。先生に小児外科の良いところを聞くと、治療をした後子供たちが元気に帰って行く姿を見ていて楽しくなる、そして何よりフロア全体が明るい、と答えて下さった。

新生児集中治療室 NICU へ行き、体重 3 キロに満たない小さな新生児を見た。小さいのにたくさんのチューブで繋がれていて、衛星管理も徹底的だった。その後に通常の病室を見たが、空気の重たさが NICU とは正反対であった。

その後は小児外科の古賀先生と矢崎先生の外来診察の見学をさせていただいた。ここでは、小児外科の先生が終始優しい表情で子供とご両親へわかりやすく説明をしている姿が見られた。お腹の手術が必要とされる子供に対し、手術をしてお腹をかつこよくしよう、と言っていたり、ベビーカーに乗っていて寝起きの子供には、怖がらないようにあまり顔を見せないようにしよう、などという小児ならではの気遣いをしていた。また、外来の先生が気さくに話して下さり、面白い面も見られた。しかしこんなに人を笑わせられる先生が明日難しい手術を四時間も行うのかと考えると、外科医というのはかつこいい面とその他の面をうまく持ち合わせていると思った。

一旦昼食を食べて私たちはナースステーションへ戻り、三日目に見学させていただく手術の説明を受けた。説明をして下さった先生は三人の子供を持つ女性の小児外科医で、手術説明だけでなく母親と医師の両立についても聞くことができた。

プログラムはここで終了となる予定だったが、三日目に手術を受ける子供のご両親の同意があり、私たちは医師が患者に手術説明をするインフォームドコンセントに参加させていただいた。インフォームドコンセントに参加したのは手術を受ける子供の母親と祖母だった。医学の知識のない方への手術説明となるため、先生はカンファレンスとは違いとてもわかりやすく図を使って説明して下さいました。そのため私たちにも簡単に理解することができました。手術説明がはじまり、起こり得てしまう危険性や対処について医師が話していくにつれて、お母さんの顔がどんどん不安で満ちていき、すごく心配であると何度も口にしていました。そして以前録画したという他の患者の同じような手術動画を見たとき、お母さんは泣き出してしまった。それを見て私たちも泣きそうになったが、医師は患者の不安を解消することも仕事であると思い出し、泣かないよう堪えた。泣いていたお母さんも先生のわかりやすい説明と安全対策に安心したのか、最後は涙を流していなかった。やはり、患者とその関係者の不安を解消できるインフォームドコンセントをよく理解していないと良い医師にはなれないと実感した。

三日目

この日は一人が体調不良であったため、二人で参加することとなった。三日目は小児外科手術見学が主であったため、朝はカンファレンスの参加から始まった。順天堂医院では小児外科の手術を多く行なっているため、カンファレンスはとても長かった。

カンファレンスを終えて手術着に着替え、手術室に向かった。初日に見学した時とは違い、消毒をする前、つまり患者の顔が見える時から見学することができた。やはり、顔が見えると本当に人の体を切っているということを実感できた。3つの手術室は自由に見て回って良いと言われたため、この日は合計で四つの手術を見たが、山高先生の手術だけで二つも見ることができた。私たちは初日と同じように遠くから見学しようとしていたのだが、山高先生は立ち台を自身のすぐ後ろに置き、私たちが見やすく見学できるようにして下さった。手術をしているところから五十センチ以内は清潔域と呼ばれていて、しっかりと手を洗った外科医しか入ることはできず、麻酔科医でさえ入ることはできない。しかし、その清潔域のギリギリまで近づかせて下さったのに加え、扱っている組織の説明をしながら手術をして下さった。二回目の手術は、力を入れた時に鼠径ヘルニアらしきものが現れる、という子供のその原因を取り除くという手術だった。鼠径ヘルニアと思われていたが実際にはそのようなものはなく、脂肪のかたまりしか取れなかった。このとき山高先生は、原因を探すために腹腔鏡を使うかもしれないと言い、家族の元へ術中説明をしに行かれた。帰ってきてから、もう一度探して無かったら閉じると言い、手術を再開した。結局鼠径ヘルニアと呼ばれるものは見つからず、閉じることとなった。術中説明は、例えば十時間以上の手術の時に5時間経ってから途中経過報告として行うなど、頻繁にあるらしい。執刀医である山高先生が術中説明に行っている間、前立ちの先生が何でも聞いて良いと言って下さったので、質問をすると学校についてや医学部について気さくに話して下さった。小児外科は一般外科とは違い、手術室の雰囲気も少し穏やかであるように感じた。というのも、初日に見学した心臓血管外科では絶対に迷惑をかけるような行動はしてはいけないと厳しく注意されていて、実際に手術をする先生方もかなりピリピリしていたからだ。一方で小児外科は、手術中もときどき笑顔が見られ、そして笑顔で説明して下さった。子供は大人の不安や緊張を敏感に感じるため、緊張しなくて良いと言われた。小児外科が穏やかで明るく感じたのはそのためだろう。手術中の山高先生はとても優しく、器具を受け取る時や手術が終わった後に先生方にありがとうと言っていた。その姿を見て、私も外科治療というのは一人では成り立たないチーム医療であることを忘れずにいたいと思った。

また、昨日インフォームドコンセントに同席させていただいた家族への術後説明にも同席させていただくことができた。この手術の執刀医は古賀先生である。手術が終わってもチューブが入っている状態に不安になる家族を前に、先生は手術中に何も起こらなかったこと、チューブは二・三日で抜けるということ、その後は思いっきり運動もできるということ saying。やはり先生の説明はすばらしく、昨日と同じように家族のみんなが不安を消していくのが分かった。

手術と手術の合間に山高教授とお話をする機会を設けていただいた。先生は幼稚園か小学

校低学年の頃から手術をすることに興味があり、外科しか考えてこなかったという。しかし手術は好きであり、好きだからこそ一生懸命になれると言っていた。また、医師を目指す人へのアドバイスも頂いた。やはり、医学に関する興味があると良いというのはもちろん、本当に医師になりたいかや、どうして医師になるのか、好きだったり興味があったりなど、しっかりと考える必要があると言っていた。先生のモチベーションは新しいことに挑戦することであり、これが小児外科を選んだ理由だという。小児外科は一般外科が呼吸器外科や心臓血管外科に分かれているのとは異なり、心臓と脳以外の手術は体全体どこでも行うため、常に違うことをやりたいという先生の性格に合っているといていた。先生は研修医に、世界で活躍する覚悟のある人は来いと言うらしいが、それは医師が常に良い医師になろうとお互い競争し切磋琢磨することで医療技術が上がり、治らない病気が直せたり、治療法の改善につながったりするからだと言っていた。先生は手術がとても好きであり、好きなことからこそ一生懸命になれると言っていたが、それが伝わってくるくらい手術中の先生は輝いているように思えた。

最後に、インフォームドコンセントと術後説明をして下さった古賀先生に医師に大切なことを聞いた。すると逃げないことが大切だと言っていた。順天堂医院は小児外科の最後の砦のような場所になっていて、ほかの病院で断られたために絶壁の上に立たされているような人も多いという。その人たちを突き放すわけには行かないので、受け入れる。先生はそう言っていたが、実際は手術中に心が折れそうになることもたくさんあるという。しかし患者の前でそんな姿を見せない先生はやはり医師という仕事を理解していると思った。最後には先生と手術室で記念写真を撮っていただき、この日は終了した。

四日目

初日と同じようにカンファレンスに参加し、手術開始まで森田先生とお話しをさせていただいた。先生は留学をした経験があり、アメリカと日本の手術の違いについて説明していただいた。アメリカは症例数が多いためたくさんの医療技術を学べるが、少し雑なところがある一方、日本では一つ一つの手術が丁寧であるため、術後に患者の容態が急変するということが少ないという。順天堂医院には海外からの留学生や大学院生もいて、日本の手術の丁寧さを感じた。

話の後、天野先生の代名詞である冠動脈バイパス手術の説明を受けた。この手術は、狭くなって血液が通りにくくなってしまった心臓の表面にある冠動脈に、他の場所から取ってきた血管を通すことよって血を流す手術である。脚や手、胸から血管が取れるのだが、どこから取るのかや、どのように血管を配置するかが決まっておらず、患者によって決めなければならない。取っても良い血管ではあるが、例えばピアニストであると、手から血管を取るのを避けるようにしているという。また、万が一他の病気でいつか手術をすることになった時に肋骨を開けた際、今回つけた重要な血管を傷つけてしまわないように肋骨の下には血管を回さないという工夫もしていた。今行なっている手術のことだけを考えるのではなく、万

が一のことを考えて次に影響を与えないようにしているという。術後の炎症反応を減らしたり、心室細動が起こらないようにするため、必要のない左心耳を取り除くこともしていた。患者のためにできることは全部してあげたいというのが天野先生の考えだと分かった。しかし取り除くのが困難である組織もあるため、患者にベストを尽くすにはもちろん技術も必要だとおっしゃっていた。天野先生は、先生の執刀された患者が長い間元気でいられることで評判があるが、それもこのためだと実感した。手術後、このような手術ができるのは千人医師がいても二十人ほどだろうと言われた。

昼食の時間に少し天野先生とお話しをさせていただいた。私は先生に、左心耳をとるなどという他の人がやらないことをできるのは自信から来るのかと聞いた。すると、先生はしっかりと過去のデータを組み合わせて証明してから患者に説明しているという。他の人がやらなくても、今ここでやっておいた方がよいことはやってあげたい、患者の容態が悪くなってからや他の人がやるのを待っていたら遅いという考えのもとであるらしい。もちろん、先生は天皇陛下にも同じことをされた。そして、もしも患者が他の治療を受ける時は、心臓手術をしたことで治療法を制限されないで大丈夫なようにしているという。すなわち、早く忘れられる医師でありたいということであるらしい。最後に握手をした時、先生の握力の強さに驚いた。

プログラムの最後は、初日に手術見学をさせていただいた患者へのインタビューだった。初日に胸骨を切って胸が開かれているのを見た後であったため、患者が背もたれもなく座っていたことにとっても驚いた。天野先生の言葉の通り、回復力の早さを感じた。手術に少しの恐怖はあったにも関わらず、天野先生の執刀は安心したという。理想の医師像を聞くと、誠実で正確な医師と答えていただいた。

やはり患者のことを考え、技術もある医師が必要とされていると思った。

四日間を通して

私はもともと小児外科と心臓血管外科に興味があったため、通常なら医学部に入るまで見ることでできない手術室の中を見るというのは、大変大きな経験になった。普段では内科医は関わる機会が多いため雰囲気や想像もしやすいが、外科医という職業は想像もしにくかった。今までは外科医の仕事は大変なことばかりだと思っていたが、やりがいも大きくて、大変だが楽しい職場だとわかった。三児の母であるお母さん外科医もいて、その先生は仕事の子育ての息抜きになると言っていたので特に驚いた。ほとんどの先生が既婚であることや、海外出身の人も多くいたことにも驚いた。

小児外科ではお母さんと執刀医のやりとりをインフォームドコンセントから術後説明まで見ることもできた。そこで医者に必要なもの、欠かせないものを学べた。私は、祖父が難病にかかり、大きなリスクのある手術をするか否かで親族が沢山話し合っているのを間近で見てきた。そのためインフォームドコンセントは、実際そうであるようにとても大切だと思っている。今までは患者の立場で見ていたものを、医者目線で見ることもできた。医師は患

者の感情と命を全て預かっているわけだから、全てを受け止めている医師の大変さがわかった。この手術は四時間であったが、十時間の手術をして術中説明が必要になることも全く珍しくはないといい、ひどい時には三十時間以上の手術になったこともあるという。

他の手術室には、生まれつき原因不明で腸に穴が空いていてどんどん腸が壊死していき、チューブで命を繋いでいるという子もいた。その子は今の医療技術では、ただ栄養を与え続けることしかできない。手術をすれば何もなかったかのように元気に帰って行く子や、あらゆる手をつくしても悪化するばかりの子もいると聞いた。子供の笑顔が見られる一方、辛いこともやや多くあるのが小児外科の特徴だという。しかし私はその現場にいたいと強く思った。

このプログラムを通して、私はもっと毎日を密にして生活しようと反省した。外科医の先生方はとても忙しくて時間さえあればずっと手術のことを考えているのだと知り、全てを医療に捧げているのがわかったからだ。この四日間は自分の今までの中で一番大きく、そして大切な経験となり、外科医になることへの覚悟もできた。目に焼き付けたシーンを自分で作るまで忘れないようにしたいと思う。